様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　3 月　31 日現在

機関番号：３２６０４
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009～2011
課題番号：21530769
研究課題名（和文）生涯発達の観点からみた高齢者の記憶の信念の特徴
研究課題名（英文）　A study on characteristics of older adults' beliefs about age-related memory changes across the adult life span.

研究代表者
金城　光（KINJO　HIKARI）
大妻女子大学　社会情報学部
研究者番号：００３２７２９８

研究成果の概要（和文）：
生涯発達の観点からみた高齢者の記憶の信念の特徴を明らかにするために、1)日常的な記憶行動や記憶課題の成績との関係、2)認知に関する暗黙理論との関係、3)社会情報との関係、この 3 点から、若年者(18～25 歳)、中年者（30～50 歳)、高齢者（65 歳以上）の 3 世代合計約 300 名を対象に調査を実施した。これまでの分析で、高齢者の一般的な記憶の信念は他の年齢群と異なる特徴が見られた（下記 4①)。現在より詳細な分析を行っている。

研究成果の概要（英文）：
The objective of this study is to explore characteristics of older adults' beliefs about age-related memory changes for self and others across the adult life span. Especially, the study examines how their beliefs relate with 1) their memory performance in everyday situation and various memory tests, 2) their implicit theory about memory, and 3) social information about health and cognitive aging. The original questionnaires including items asking about the above information and various cognitive tests were administered to the three age groups: 99 young (19-25 years), 97 middle-aged (38-55 years), and 104 older (63-75 years) adults. The data is under statistical analyses.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：実験心理学
キーワード：記憶・信念・高齢者・メタ認知・生涯発達

１．研究開始当初の背景

高齢者の記憶の信念は、不正確な自己の記憶能力のモニタリングに関係があり、高齢者の記憶行動にマイナスの影響を与えている可能性が指摘されているが、詳しいことは明らかでない。

２．研究の目的

本研究では高齢者の記憶の信念について、1)日常的な記憶行動や記憶課題の成績との関

係、2)認知に関する暗黙理論との関係、3)社会情報との関係、この３点から調査した。調査結果をふまえ、高齢者の記憶の信念に影響している要因や信念の特徴を若年群・中年群と比較することによって生涯発達の観点から総合的に考察し、その問題点を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

本研究は２部構成で行われた。第１部はアンケートの作成、予備調査、質問項目の選定、第２部は、第１部で作成されたアンケートと記憶テストの実施、である。第２部では、若年者(18～25 歳くらい)、中年者（30～50 歳くらい)、高齢者（65 歳以上）の３つの世代から横断的にデータを集める。第１部を初年度（平成 21 年度）に完成させ、第２部を平成 22・23 年度で実施した。

第１部のアンケートの作成では、①記憶の信念を測定するための尺度や尺度項目の設定、②日常的な記憶行動についての質問項目の設定、③認知、とりわけ記憶に関する暗黙の理論を調べるための調査項目の設定、④社会情報の影響を調べるための調査項目の設定、以上４つの観点から質問項目の設定を行った。予備的調査を実施し、最低限必要と考えられる質問項目を選定した。

第２部は、第１部で作成されたアンケートとともに、記憶力・認知能力を測定する複数の標準テストや研究代表者がこれまでに独自に開発した認知テストを行った。基本的にすべての研究は、研究補助者の協力を得ながら研究代表者と研究分担者が行った。研究補助者には、謝金を支払って、アンケート実施、データ入力などを手伝ってもらった。

４．研究成果

１）一般的な記憶の信念の特徴

健常な成人が一般的な記憶能力の年齢による変化をどのように捉えているのかについて Lineweaver & Hertzog (1998)が開発した GBMI を用いて,若年成人群 99 名（19－25 歳）,中年群 97 名（38－55 歳）,高齢者群 104 名（63－75 歳）を対象に調査した。原版の短縮版 GBMI を改良し,評定対象年齢を 20 - 90 歳から 10－100 歳の範囲に拡張し,質問紙の最後に基準とした回答の根拠について尋ねた。GBMI は,記憶能力に関する質問項目に対して評定年齢の対象範囲において所与の線分上の任意の位置に印（短い横線）をつけて回答する無段階の評定方法である。したがって,私たちが一般成人の記憶能力の生涯における変化をどのように考えているのか,その変化の軌跡を線分上の印を平均化することによって知ることができる。主な結果として,以下の４つの点が明らかになった。一般に,(a) 若年成人群,中年群は 20 歳をピークに記憶能力が低下していくと考えているが，高齢者は記憶能力を 20-30 歳をピークとし、他の年齢群よりも低下をより遅く見積もっている（代表的な結果として図１を参照されたい），(b) 名前の記憶力は総じて低く評定された．また，全般的な記憶能力の評定は，細かいことを覚えている能力とほぼ一致した，(c)どの年齢群でも 10 歳の子どもは 40 歳の大人とほぼ同程度の記憶能力があると考えている，(d)記憶能力の一般的信念は，経験に由来する過去や現在の自己の記憶能力,および,自己の身近な人の記憶能力に基づいている。　　（学会発表②、論文投稿中）

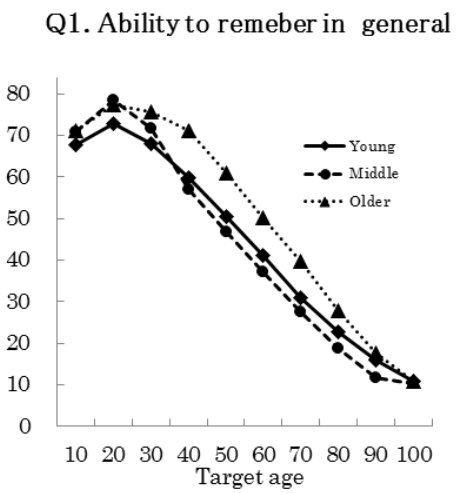

図 1. GBMI における記憶能力全般の加齢による変化の評価得点

２）記憶の自己効力感と記憶課題・認知課題の成績との関係

4 種類の記憶課題にすべてにおいて、3 つの年齢群のＺscore に非常に有意な差が見られた。短期記憶課題、手がかり再生、自由再生では、高齢群は若年群と中年群より成績が悪かった。若年群と中年群の差はなかった。ソース・モニタリング課題では、高齢群、中年群、若年群の順に成績が良くなった。記憶以外の認知テスト、知覚的処理速度(2 種類)、空間の視覚化能力（2 種類)、帰納的推論（2 種類)、関連付けの流暢性（2 種類)、言語的知識(2 種類)を問う計 10 種類のテストでは、言語的知識の反意語テストを除く 9 つのテストで、3 つの年齢群のＺscore に非常に有意な差があり、高齢群、中年群、若年群の順に成績が良くなった。記憶力全般の自己効力感とこれら認知テストの成績の偏相関分析（教育年数と鬱尺度得点を制御）の結果、中年期以降の成人では記憶課題や他の認知課題の成績の良い人ほど記憶の自己効力感が低くなる傾向が示唆された。従来から高齢者が記憶に対して誤った信念を持っている可能性が指摘されてきたが、この傾向は実は中年期よりすでに始まっている可能性が考えられる（学会発表②)。

３）健康・医療・加齢に関する情報に対する接触状況・評価・不安度についての調査結果

健康・医療・加齢に関する情報に対する接触状況・評価・不安度について調査した結果、これらの情報源はすべての年齢群において、テレビ、友人、家族の割合が高かった。ただし、若者はインターネット、中年者は職場、高齢者は新聞に依存する傾向が見られた。若者も中年者や高齢者と同程度に認知症による記憶力の低下に関する情報、加齢による健康状態や記憶力の変化についての情報に不安を感じている。また、女性は男性よりも加齢による健康状態や記憶力の変化についての情報に関心が高く、参考になると評価している。すべての年齢群で自分たちが必要とする健康や医療に関する情報を探すことが難しいという不満を抱いていることが明らかになった（学会発表①)。

４）日本版成人メタ記憶尺度(the Metamemory in Adulthood questionnaire: 日本版 MIA)の構造と短縮版の開発

The Metamemory in Adulthood questionnaire（以下 MIA とする）(Dixon & Hultsch, 1983; Dixon, Hultsch, & Hertzog, 1988）は,高齢者を含む一般成人が自分の記憶をどのように理解しているか,一般成人のメタ記憶を多面的に測定する尺度として,欧米を中心にさまざまな国や言語で尺度の信頼性や妥当性が検証されている,もっとも利用頻度の高いメタ記憶尺度の 1 つである。本研究では日本語版の MIA の作成,および,短縮版 MIA の作成を目的とした。まず MIA の全 108 項目の日本語訳出において明らかになった問題点（金城,井出,森,2008）を改善し,原版開発者の許可を得て新たな尺度を若者 240 名（平均年齢 20.6 歳）と高齢者 268 名（平均年齢 70.2 歳）,計 508 名を対象に実施した。因子分析の結果,データ全体,および,若者と高齢者に共通して適合する下位尺度としては,原版 MIA の達成因子を除く 6 因子（変化, 不安, 能力, 支配, 方略, 課題）構造になることが確認された。また,訳の改定にもかかわらず別の因子に負荷する項目や寄与率が低い項目,多重負荷項目があり,原版の質問項目すべてをそのまま日本人に適用するのは妥当でないことがわかった。そこで,これらの項目を除いた 44 項目で短縮版を作成したところ,回転前の因子の全分散を説明する累積寄与率,および,各下位尺度の Cronbach の α係数の値が向上し,かつ,年齢群別,性別ごとに分析しても安定的な 6 因子構造が確認された。

（現在論文投稿中）

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計０件）
〔学会発表〕（計３件）

①Kinjo,H. & Shimizu, H. (2011). How do we perceive social information on health and aging through media?: A preliminary cross-sectional study in Japan. 9th Tsukuba International Conference on Memory. Gakushu-in University　査読無

②金城 光 (2011). 記憶に対する信念と認知行動との関係　日本心理学会第 75 回大会ワークショップ　「認知加齢研究の最前線」（日本大学）増本康平・佐藤真一・権藤恭之・金城光ほか２名　査読無

③Kinjo,H. & Shimizu, H. (2010). A cross-sectional study of memory beliefs across the life span with the Personal Belief about Memory Instruments (PBMI) and General Belief about Memory Instruments (GBMI).Tsukuba International Conference on Memory. Gakushu-in University 査読無

〔図書〕（計０件）

６．研究組織

(1)研究代表者
金城　光（KINJO　HIKARI）
大妻女子大学・社会情報学部・准教授
研究者番号：００３２７２９８
(2)研究分担者
清水　寛之（SHIMIZU　HIROYUKI）
神戸学院大学・人文学部・教授
研究者番号：３０２０２１１２

以上